

一人一殺・一殺多生

日本義塾 新村 紘宇二

1. 「一人一殺」の思想は、「等価交換」の思想であり、万人が万人に対して、「等価」とあるという「万人対等」「万人平等」「万人均等」の「万人等神」を意思表示したものである。人の祖先は祖神であり、人は皆、祖神の子孫、末裔だからである。
2. **だが、我が子といえども虐殺虐政の斧を振るう者は成敗しなくてはならないのだ。**
3. 人は皆、仕事を持ち仕事をする。仕事をする事によって、収入を得、生活をする。人は皆、生活を維持するために「仕事」をするのである。「仕事」をしないと収入が得られず、収入が得られないと、「泥棒」をしなければ生きていけないからである。「泥棒」に成り下がりたくないから、人は皆、職を求め「仕事」を求め、出来れば、好みにあった「仕事」に就きたいのである。
4. ところが、この現世は、その「仕事」なるものが、一握りの「二階組官僚」という手合に集中し、この「二階組官僚」の配分によって、下々の人々に「仕事」が割り振られているのだ。
5. 前記4. のシステムが「公私大学制度」「公私試験制度」で「既得権益」の温床である。
6. いい「仕事」にありつきたいと願うものは、その仕事先の採用条件に見合うように、その「条件」の関門を突破しなくてはならない。この第一関門が学歴だ。子供に学歴を付けさせる為に親は金を稼ぐ。稼げなかった親はいい学歴を子供に付けさせてやれない。子供は希望する「仕事」に就くことはできない。親にお金の有る無しで、子供は学歴の機会均等を失う。貧者の子は生まれながらにして貧者の道を歩まねばならない一方、貧者・金持ち子は、生まれながらにして貧乏を知らず、悠々と学歴を得、希望の「仕事」にありつく。この構図に「万人対等」「万人平等」「万人均等」がないことが伺える。この構図のなかでは人々の価値は「等価」ではなく、「貴賤」「上下」「主従」「貧富」「支配階級と被支配階級」に聖別されてしまう。この選民社会が現代世界の実態である。つまり機会均等でなく「親の七光り」の仕組みが諸悪の根源なのである。
7. どんなに高貴な「地位」についていても「殺され」てしまえばもともこもない。社会的に見て、この高貴な「地位」についてる者の、社会的評価価値は1000だとした場合、その者との「等価価値」は誰しもが1000である。しかし、落ちこぼれで、社会的評価価値が0だとされた者が、この1000の者を「殺した」場合、この0と評価されていた者は、とたんに1000になり、反対に1000だった高貴な「地位」についていた者は、殺されて抹消された事により0になってしまう。このような「等価交換価値」が「一人一殺」の思想なのである。**寸鉄人を刺す「刺し違え」の思想である。**
8. どんなに偉そうに振る舞っても、殺されてしまえば0で、この事は、殺してしまえば、その偉そうに振る舞っていた奴が、仮に社会で1000の価値があると評価されていようが、0になってしまうという「価値の風化」に曝されるという事なのだ。
9. 毎年三万人以上の者が、無念のうちに自殺していく。この者達が、自分の価値を、「等価交換価値」に見出せば、偉そうにしている悪党共が、うようよしているのだから、この悪党共の「社会的評価価値」と「等価交換」してしまえばいいのである。しっかりと「刺し違え」てから自殺を考えればいいのだ。そうすれば、この世から毎年三万人の悪党共がいなくなるわけで、どれだけこの世が住みやすくなることか計り知れないのである。自分の「等価交換価値」を発現するのだ。自殺はそれからだ！
10. さて、ならば、悪党共とは一体、誰彼のことをいうのだろうか！、当然のように、「逆賊二階組」(大蔵省⇒財務省・主税局・主計局)の徒党徒輩である。国民を愚弄し、血税を巻き上げ、その血税を己ら徒党徒輩の私腹権益の為にのみ使う輩共である。

11. 「一殺多生／いっせつたしょう」は、**仏教の思想**で、一人の極悪人を成敗して、多数の者を救い出すこと。「多生」はより多くの人を助け生かすこと。本来、仏教において殺生は罪悪であるが、出典では菩薩が大盗賊を殺す事例をあげて功德を説く。
「瑜伽師地論/卷 41・10 戒品 (謂如菩薩見劫盜賊 為貪財故欲殺多生)」である。**姦賊討つべし!!**
12. 当然のように、**ブッダ／釈迦**は人間だった。苦行に耐えられず、苦行を捨ててしまった、むしろ弱虫で、意気地なしの意志薄弱な人間だった。晩年になっても、「仏の顔も三度まで」の喩え通り、人間そのものの**「煩惱即菩提」**の人だった。
13. ブッダ／釈迦が釈迦族の王子としていたカピラ城の隣にコーサラ国という強大な大国があった。この国王パセーナディが妃を釈迦族から迎えたいと、使者をカピラ城に出したが、その使者の口上に「もし不承知ならば力づくでも」という一言があり、釈迦族は憤慨した。だが、コーサラ国はとても強力に相手のできる国ではないので、ある長者が下女に産ませた娘を長者の娘としてパセーナディ王に嫁がせた。妃は、王子ビドゥーダバを産み、王子が八歳になった時、弓術を学ぶためにカピラ城に留学した。新しくできた神聖な講堂でビドゥーダバが修行をしているのを見て、釈迦族の者達は「下女の子をなぜここに入れたのか」と言っ、王子の帰国後、彼のいた場所の床を削り、その下の土を七尺も掘って清浄な土と入れ換えた。
 このことを聞いたビドゥーダバは身を震わせて怒り、付き人のバラモンに「もし自分が王位についたら**「釈迦族に辱められたことを思い出せ」**と一日に一回必ず私に言い聞かせよ」と命じた。父王パセーナディが死んで、王子が王位を継いだ時、バラモンは命令どおり実行した。
 ビドゥーダバ王は、軍を率いてカピラ城へと向かった。これを聞かれたブッダ／釈迦は、やがてカピラ城へ通ずる街道にある一本の枯れたチークの木の下で端座していたところ、その前を通りかかった王は、ブッダ／釈迦に礼拝してから「ほかに繁った木があるのになぜ枯れた木の下にお座りですか？」と尋ねると、ブッダ／釈迦は「王よ、親族の蔭は涼しいものだ」という答えをした。(チーク樹は釈迦族ゆかりの、親族の象徴的な樹であった)王は、ブッダ／釈迦が釈迦族の王子出身であることと、**「遠征のとき沙門に会ったなら兵を返せ」**という言い伝えを思い出し、その場から兵を引き揚げさせたのである。しかし、王はまもなくかつてのことを思い出し、耐え切れなくなり又兵を出した。すると、又、ブッダ／釈迦が枯木の下で座っていたので、王はまた兵を返した。同じことが三度あったのだが、四度目にはブッダ／釈迦の姿は見えなかった。弟子の目連が神通力でカピラ城を救おうとしたが、「釈迦族の積んだ業の報いは、自ら受けるより仕方がない」とブッダ／釈迦はとどめた。ブッダ／釈迦は三度目まではかつての、一族の為に滅亡から救おうと努力したが、四度目には因果応報の理にまかせたのだ。この為、釈迦族はビドゥーダバ王の為に滅亡した。という逸話である。だが、この逸話の真実はこうだ！
14. ブッダ／釈迦は、自分の両親(実父・義母)、妻、妾、子供等の血族を救出する為の、その説得に時間がかかり、やっと血族達が説得に応じて「出家」したので、四度、端座することなく、釈迦族を見殺しにしたのが、真実であり史実なのだ。
 この釈迦の釈迦族見殺しの事例からすれば**「一殺多生」**は功德の閻魔道なのである。
15. つまり、「一殺多生」ということは、聖書でいう**「聖絶／民族浄化／ジェノサイド」**という大量虐殺の「大罪」でなく、虐政に君臨する霸道の姦臣に「天誅」の一撃を加えて「改心」させるということで、それは虐政からの解放を意味し、その天誅の一撃のことを「一殺多生」というのである。それは、**毛沢東**が言った**「造反有理」「革命無罪」**の思想であり、**「五斗米道」**にみる**「黄巾の乱」**の如き、熱血漢達の**「血の狼煙」**でもある。**「国家は国民が作ったものであり、国民に仇なす政府なら武力で転覆させても良い」**
トマス・ホブズの言う通り**「革命権」**の行使でもある。**「一殺多生」**しかないのだ!!